
とある小学生二人のバレンタインデー前夜

ししとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある小学生二人のバレンタインデー前夜

【Nコード】

N9256Q

【作者名】

ししとう

【あらすじ】

二月一二日のとある阿笠邸の二コマ。

バレンタインネタ。

（前書き）

何とか間に合いました。
バレンタインネタです。

時は、二月一三日。

はいばらあい よしだあゆみ

その日灰原哀と吉田歩美は全ての男子を追いつ出し、阿笠邸のキッチンで独占していた。

「さあ！ 明日はバレンタインだよ！」

そう言うのは頭にカチューシャをつけ、大きな瞳をいつも以上にきらきらと輝かせて、淡いピンク色のエプロンという少し趣味を疑ってしまうぐらいメルヘンな格好をした歩美だ。エプロンはよく見てみると端の方にフリルが施されており、使い勝手よりもデザインを重視したエプロンとしては失敗作に見えるようなとても可愛らしいモノだ。

「……だから、なに？」

そう言うのは隣でぶすーとした表情で自分の趣味とはまったく合わない歩美と同じエプロンを身に付けて、いつも以上に機嫌が悪そうに瞳を細めて、片手で目にかかった赤みがかかった茶髪を掻いている哀だ。

「あの……私、読みたい本があるんだけど……」

正直に言つと哀は歩美をここで張り倒してでも地下室に籠りたかった。

何故なら、

「何言ってるの！ 今日が何の日か分かってるの！」

歩美の気合の入りようがめっちゃくちゃ怖かった。

「別に……平日でしょ？」

「哀ちゃんのおバカ！」

涙目になって怒り出した。

そんな顔をして怒るくらいなら、最初から怒らなければいいのに。
「な、なにが！？」

「それでも哀ちゃんは乙女なの！ 恋という言葉に恥らう可愛らし

「い乙女なのかしら！」

「意味が分からない！？」

歩美に釣られるようにして声が大きくなるが、歩美はそんなこと微塵も気にした様子を見せずに、ズバンッ！！と阿笠邸に張ってあるカレンダーを指を指す。

そのカレンダーは間違いなく阿笠邸に張ってあるものだ。

そのはずなのだが。

……はずなのだが。

何故か、そのカレンダーの二月一四日の場所が、メルヘンちっくなピンク色のペンで書いたであろうハートマークが記されていた。

「いつの間に……」

ぼやく哀を尻目に歩美はやはり瞳をきらつきらにさせながら、

「はいここで問題です。明日は何の日でしょうか？」

「何の日って……、」

哀は言葉に視線をカレンダーに送る。

どう考えても答えは一つしかない。

「今日は……日曜日よね？　じゃあ……月曜日じゃないの？」

「ちっがうでしょ！」

ぱっちーん、と哀は歩美に頬を叩かれた。

明らかにツツコミの延長線上のモノなので痛くもなんともないのだが、どうにも今日の歩美の気合の入り方は異常だ。

………と、なると。

やはり答えはアレなのかもしれない。

「はあ……、もしかして……バレンタイン？」

「そう。そうなんだよ、哀ちゃん！」

胸の前で軽くガッツポーズをする歩美。

それに引き換え哀はというと、がっくりと頭を抱える。

「もしかして……本当にもしかして、そんなどうでもいいことで博

士の家に来たの？」

「え？ どうでもいいって……」

キョトンと小首を傾げる歩美。

「あのね。私には送る相手がいないの。まあ……たといいたとしても私みたいに可愛くない女の子にチョコレートなんて貰って喜ぶ人がいるとも思えないしね。吉田さんと違って私は可愛くないのよ」それは皮肉めいた言葉とは違う。何というか、哀の中で本当にそう思っているような言葉だ。

だからこれで話は終わりだと思う。

哀はそのままエプロンを外そうと手を伸ばす。

と、

「そんなことないよ」

歩美が突然そんなことを言った。

「え？」

今度は哀がキョトンと首を傾げる。

「哀ちゃんはとってもかわいい」

「――、！？」

真顔でそんなことを言われると流石に照れる。

小学一年生の子供に打算的な『かわいい』という言葉と言えるはずがない。だからこそ、その真っ直ぐな言葉に哀はわずかに頬を桜色に染めた。

「私は哀ちゃんのかわいい所をいっぱい知ってるよ。それを哀ちゃんは自分では可愛くないって思うのかもしれない。けど、そこが哀ちゃんの可愛い所だと思うんだ」

全身がむず痒くなった。

あまりに真っ直ぐすぎて。あまりに素直すぎて。

歩美を直視出来ずに哀は目線を逸らす。

すると、

「——ひう、」

歩美の冷たい手が哀の頬を挟む。

「ほら、かわいい」

そう笑う歩美だが、誰だって冷たい手でいきなり自分の頬を触られてもすれば声が漏れるのは仕方がないと思う。

何というか……ずるい。

「はぁ……分かったわ」

半分仕方なくといった感情も混じったように哀は小さく頷いた。

それを見ると歩美も哀の頬から手を離して、にかつと笑顔になる。

「それじゃ、二人でがんばろ！」

純真な言葉を聞いて哀は思う。

この少女は一体どこまで分かっているのだろうか？

送る相手はきつと同じ。

けれど、それは受け取ってもらえない。

否。

受け取ってはくれるかもしれない。

しかし。

その中に詰め込んだ想いに気づかれはしない。

何せ、

送る相手は世界で一番の。

探偵さん^{どんかん}なのだから。

（後書き）

帰ってきてそのまま勢いのまま書きなぐりましたのでオチがかなり弱いです。

本当は書くつもりなどなかったのですが、あまりにもテレビや雑誌でバレンタイン、バレンタインとうるさかったので、何か書かないといけない気がしました。

感想・評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9256q/>

とある小学生二人のバレンタインデー前夜

2011年10月4日14時25分発行